

寄稿

私と作業科学 ー過去，現在，未来ー

社会医学技術学院

西野 歩

Ayumi Nishino

(日本作業科学研究会理事)

ー過去ー

作業科学に出会ったのは、1999年の春、札幌医科大学から1通のセミナーのお知らせが学院に来たことがきっかけでした。セミナーのお知らせには、人間には作業が必要など書いてあったのでしょうか、文面の一部に強く惹かれたことを覚えています。先輩の作業療法士をなぜだか熱烈に誘い、一緒に行くこととなりました。事前に「作業科学」(三輪書店、1999)を購入し、勉強をしました。しかし、個性的な論文の集合体は何を私に語りかけているかは分からず、とにかく読んだ、という状況でした。友人が札幌にいて会いたかったこと、東京の毎日は暑くて札幌は涼しいだろうなと思ったことが純粋な動機であったかもしれません。

第1回目の作業科学は、英語、英語、英語、分からない概念、分からない作業科学の言葉、と非常に苦しかったことを覚えています。また、セミナーに参加されている諸先輩方は協会誌やニュース、講習会でお名前を聞く方ばかりで、圧倒され圧迫された気持ちになりました。当時札幌医科大学の大学院に通っていた同窓生に分からない箇所を質問し、彼女が非常に熱く作業科学の必要性を語ってくれたことに助けられました。そして「よく分からないが、非常に大切な学問を学び始めたんだ!」と興奮して帰京しました。

その後もセミナーに通い続けました。しかし第7回ぐらいまではよくわかっていなかったように思います。徐々に概念を理解し、新しい知識が頭の中で構成されていったようでした。そして深く知りたい、研究しなくてはならないと感じ、大学院に進学しました。大学院での研究は、作業科学の論文を何篇も読み、自分の研究方法を考え構成し、非常に苦しく楽しい時間でした。このときに論文を読んだ事が現在大きな助けになっています。自分で論文を読み理解し、論文を利用することで、作業科学の素人からやっと脱却できたように思います。

ー現在ー

私が今、強く感じるのは、仲間が必要だということです。年に1回研究会で作業科学についてしっかりと話し合う以外に、日常において作業科学について話し合う仲間が必要です。

半年ほど前から、私は東京近郊に仲間を作ろうと、職場近隣の勉強会などで作業科学の話を積極的にしに行くようになりました。この作業科学行脚によって、多くの作業療法士と共に作業科学と作業療法を語り合い、また隣接領域の専門職と話し合う機会が出来ました。作業科学を最も語り合える仲間は作業療法士ですが、リハビリテーション専門医が深く理解を示してくれたのが発見でした。

ー未来ー

作業科学を学び続ける私は、より分かりやすい作業科学の授業をするようになるでしょう。作業の魅力を学生に伝えるのがうまくなるかもしれません。作業科学を身近なものとして卒業する作業療法士は、この知識を生かして、世の中に貢献します。

作業科学を学ぶ作業療法士たちは、子どもの分野では、毎日の時間管理と作業の形態に影響を及ぼすでしょう。遊びや学習の意味を見直すことになるので、おもちゃや学習ツールにも影響を与えるでしょう。

青年・成人の分野では、労働環境に影響を与えます。また、人間のリズムに焦点を当てた健康法などが着目されるかもしれません。自分の好きな仕事に就くことが自己実現に繋がるという考え方は変更され、労働・家庭・自分の趣味など総合的な人生の満足を求めるような人たちが多くなるかもしれません。これによって労働者を疲弊させている経済社会が変更を余儀なくされるかもしれません。

高齢者では、若い人たちとのワーキングシェアが行

われ今後の日本や世界を支援できるかもしれません。ボランティアを自己実現の一環と考えるあらゆる年代の人たちが、高齢者を支えるかもしれません。高齢者は人への思いやりや礼儀など対人交流に必要な技能を十分に若い世代に伝える事ができるかもしれません。また、若い人たちから新しい作業を教わり、挑戦しつづけることができるかもしれません。

作業科学の知識を利用することは、より環境を大切にした生活を人間が始めるきっかけの一つになるのではないのでしょうか。お互いに助け合う健康な社会になれるのではないかと考えます。

脳天気な考えと思う人がいるでしょう。でも、あなたは少しでもこのようなことを考えたことはありませんか。一人ひとりの挑戦が、作業科学に影響を及ぼし、作業療法を繁栄させ、自分の人生と対象者の人生をより健康にしていくと思います。私は、その一翼を担いたいと思っています。